第 26 回宗教研究会（2016 年 11 月 28 日）「2016 リオパラリンピック大会　視察報告　―2020 東京大会に向けて―」

難波真理

リオ 2016 パラリンピック競技大会が 9 月 7 日～ 18 日の 12 日間に渡って開催された。私はこの間の 10 日～ 15 日（現地時間）、主にバッハ地区にあるオリンピックパークで開催された競技種目を観戦し各競技の現状や会場、施設の様子、パラリンピックの開催状況を視察した内容を報告した。

まず初めに障がい者スポーツについて簡単に説明した。障がい者スポーツ生みの親であるルードヴィッヒ・グッドマン博士は“失った機能を数えるな、残った機能を最大限に活かせ”という言葉を残した。障がいを持つと「失ったもの」や「できないこと」を考えがちだが、そうではなく今ある能力、機能を活かすことでより充実した生活やスポーツを楽しむことを説いた。さらに日本障がい者スポーツ協会が発表している日本の障がい者スポーツの将来像（ビジョン）と具体的施策の概要を説明し、日本の現状について説明した。

続いて、リオパラリンピック大会の視察報告をおこなった。

リオパラリンピック大会は 160 カ国以上の国・地域から参加し、22 競技 528 種目が実施された。

リオに到着後、最初に観戦したのは柔道だった。天理大学で柔道を学んだ正木健人選手が出場した 100kg 超級の 3 位決定戦を応援した。試合開始までの間、畳の上でサンバが踊られるなど、リオらしい演出に衝撃を受けた。試合の結果は見事銅メダルを獲得し幸先のいいスタートとなった。その後の日程ではボッチャ、ゴールボール、車いすテニス、水泳、ウィルチェアラグビーなどを観戦した。

実際に現地でさまざまな競技や施設等を視察することでハード面とソフト面でさまざまな課題が見えた。

ハード面では、未完成の施設を使用していた感があった。会場でも観客席を増設した結果、柱が視界を遮り試合が見えないような構造となった席や、車いすでのアクセスが悪いなどが見受けられた。パーク内の案内設備が無いに等しくどこで何の競技が実施されているか、また、リアルタイムにおこなわれている競技は何かなど、まったくわからなかった。

ソフト面では視覚障害の種目では初めて競技を観戦する人たちへの指示がなく、あっても徹底できないため雑音が大きく、競技に支障が出るなどしていた。他の競技に対してもそうであるが、観客へのルールやマナーの周知がされる必要があると感じた。

ハード面では数多くの問題点が見受けられたが、それをリオの人々の陽気で明るい人柄によってフォローされていたように思う。どの競技に行っても、ブラジルへの応援だけでなく、他の国に対しても楽しく、踊りながら応援をしていた。そのため帰る頃には明るい気分にさせられているのであった。

オリンピック開催前から施設の建設やセキュリティー面など、リオで開催できるのか危惧されたがオリンピック・パラリンピックとも大きな問題なく開催することができた。

リオに出発する前、一番心配したのはセキュリティー面だった。観戦よりも何よりも無事に帰ってくることができるのか、はたまた帰ってきてからも体調面に異常はないだろうか。実際にはバッハのオリンピックパーク周辺は警察や軍隊がいたるところで警備していたおかげで、幸い無事に帰国することができた。

リオでは次の東京大会開催に向けてあらゆる競技で日本からの視察や調査がおこなわれていた。また、競技施設外でもこれまでのパラリンピックと比べてより多くの日本人に出会った。集客や販売、施設調査など競技実施以外の面でもさまざまな企業、人が視察に訪れ、東京大会をより良い大会にするべく、すでに動いていることを実感した。

追記として、最終日にリオで天理教イパネーマ布教所長をされている赤坂セルソ氏にお世話になりコルコバードの丘に案内していただいた。オリンピック・パラリンピック関連施設以外の場所は治安が悪く、私たちだけでは観光することができなかったのでとても助かった。ホテルに大きなワンボックスカー「天理号」が到着した時はとても感激した。この場を借りて赤坂氏に感謝申し上げる。

第 301 回研究報告会（3 月 31 日）

堀内みどり

「ネパールの初等教育：天理大学国際参加プロジェクトに参加して」と題して報告した。まず、2 月 12 日（発）～ 27 日（帰国）に行われた天理大学国際参加プロジェクトに 21 日まで参加した経緯とプロジェクトの活動内容を写真を通して紹介し、その中で訪問した JICA ネパール事務所での教育部門担当者の話やプロジェクト参加中に見聞したことがらから、現在のネパールにおける初等教育の現状の一端について報告した。首都カトマンズを中心として、私立学校が増加している。私立学校では英語での教育が主となっていて進学や就職につながると考えられ、私立へ通う児童・生徒が急増している。公立学校では、従来の暗記型・詰め込み式が主流であり、その内容にも課題がある。また教師の教育態度や質にも問題があることなどが指摘されている。

今回訪問した山地にある二つの小学校では女子児童の数が男子を上回り、男子が私立校へと流れているのではないかと推測された。また、おやつの配布が児童の出席向上に役立っていること、民族の違う（言語の違う）子どもたちが一緒に学ぶことの困難さについて考えさせられた。

『グローカル天理』合本のご案内

2010 年から 2016 年に出版された『グローカル天理』の合本を頒布しています。これは各 1 年分（12 号分）を 1 冊にまとめ、簡易製本したものです（頒価は 200 円）。

合本はご注文を受けて製本しておりますので、研究所事務室にお越しの際は、**必ず事前に電話、FAX、もしくは E メールでご連絡ください。**なお、郵送による頒布はできかねますので、ご了承ください。